

平成26年度事業報告書

平成26年4月1日～平成26年12月31日

1. 第24回日米草の根交流サミット大会の開催 <定款上の該当条項:第4条>

開催地 : サンディエゴ地域一帯

開催時期 : 平成26年9月23日～9月30日(6泊8日)

参加者数 : 日本からの参加者 : 173名(ホームステイを含む全日程参加は141名)

イベント別参加者数 :

- ー オープニング式典とレセプション(パドレス観戦) 200名
- ー ホスト・ファミリー総数 250名
(家族構成人員の総数)
- ー クロージング式典とフェアウェル・パーティー(上記に含まれる)
- ー ボランティア、イベント参加者、スポンサー、分科会への参加等 550名

参加者総数 : 約1,000名

なお、この大会の日本からの参加者には、TOMODACHI イニシアチブ、東京倶楽部からの助成金、また日本航空、京セラ、トヨタ自動車からの寄付を得て参加した岩手県普代村と福島県広野町の中学生・若者・引率者が含まれている。

内 容 : 第24回日米草の根交流サミット大会を2014年9月23日から9月30日の計8日間、米国カリフォルニア州サンディエゴ一帯で開催した。主催は、CIE、CIE-US、また現地のサンディエゴ・ティファナ日本協会。

気候温暖で陽光まぶしいサンディエゴ一帯での大会は、現地のホスト・ファミリーやボランティアの温かなホスピタリティに加え、連日好天にも恵まれ、青い空と海、美しい緑と色とりどりの花々に囲まれた充実した大会となった。

● オープニング式典(9月23日)

オープニング式典は、MLBパドレスの本拠地であるペトコ・パーク(球場)の講堂で開催され、名誉総領事のケイト・レナード氏、サンディエゴ郡スーパーバイザーのロン・ロバーツ氏、米日カウンシル副理事長の

スザンヌ・バサラ氏が挨拶。恒例の中濱家とホイットフィールド家による「地球儀の交換」は、いずれも6代目となるスコット・ホイットフィールド氏と中村明日香氏との間で行われた。加えて、ペリー提督子孫のマシュー・ペリー博士が挨拶。

岩手県普代村から参加した普代神楽保存会の中学生19名が「七頭舞」を披露したのに加え、福島県広野町の中学生14名が広野町を紹介するプレゼンテーションと合唱を披露した。

● オープニング・レセプション (9月23日)

式典の後、球場のルーフトップにて、パドレス vs ロッキーズの試合を観戦しながらのオープニング・レセプションが開かれた。

試合直前のフィールドでは、万次郎とホイットフィールド船長、またペリー提督の子孫が紹介された。また、普代村の中学生が大観衆の前に「七頭舞」を披露。球場の大スクリーンにも映しだされた。この試合の始球式は、広野中学校3年生の土屋昌君が務め、TVでも放映された。参加者達は、フィールドでのイベントや試合を見ながら、カジュアルなディナーをおおいに楽しんだ。

● 早朝セミナーとローカル・ツアー (9月24日)

大会2日目の朝8時から、サンディエゴ・コンベンション・センターの一室で早朝セミナーを開催。以下の3つのショート・セミナーでサンディエゴを学んだ。

- － サンディエゴの日系アメリカ人の歴史 (講師：スーザン・ハセガワ)
- － サンディエゴのビジネス (講師：中野昌彦)
- － サンディエゴのツーリズム (講師：上野浩)

セミナーの後は、参加者は以下の4つのオプション・ローカル・ツアーの中からそれぞれ希望するツアーに参加し、サンディエゴを観光した。

- － サンディエゴ動物園
- － USS ミッドウェイ博物館
- － シー・ワールド
- － ハーバー・クルーズ

● テーマ別分科会／コロナド地域分科会／東北中学生特別プログラム

(9月25日～28日)

大会3日目の9月25日からは、大会の中心部分である分科会が3泊4日で行われた。サンディエゴ大会の特徴は、地域に分かれた分科会は1つとし、テーマ別の分科会を6つ設けたこと。さらに、岩手県普代村の中学生と、福島県広野町の中学生のためには、特別プログラムを設けた。

分科会名称と参加者数は以下のとおり。

< テーマ別分科会 >

- | | |
|-------------|-------|
| 1. バルボア・パーク | (22名) |
| 2. ビジネス | (14名) |
| 3. 料理とお酒 | (12名) |
| 4. 歴史 | (15名) |
| 5. ミリタリー | (9名) |
| 6. 自然満喫 | (15名) |

< 地域分科会 >

コロナド分科会 (9名)

< 東北中学生特別プログラム >

- | | |
|--------|-----|
| 普代村中学生 | 18名 |
| 普代村の若者 | 2名 |
| 普代村の引率 | 5名 |
| 広野町中学生 | 14名 |
| 広野町の若者 | 1名 |
| 広野町の引率 | 6名 |

計46名

それぞれの分科会は、大会を共催したサンディエゴ・ティファナ日本協会の職員やボランティアの協力で大変充実したものとなり、参加者の満足度も高いものとなった。特に、普代村と広野町の中学生達にとっては、大変刺激的な経験となった模様である。

● クロージング式典とフェアウェル・パーティー (9月28日)

分科会の後、9月28日の午後、参加者はホスト・ファミリーとともにサンディエゴ市内にあるバルボア・パーク内の日本友好庭園に再集合し、大会の最後のプログラムであるクロージング式典とフェアウェル・パーティーに参加した。

戸外での式典はサンディエゴ太鼓の演奏で始まり、続いて在ロサンゼルス日本総領事の堀之内秀久氏と、在サンディエゴ名誉総領事のケイト・レナード氏が挨拶。その後、普代村の中学生が迫力のある七頭舞を、広野中学生らは合唱を披露した。

加えて2015年に開催する大分県から参加した15名が大分を紹介。翌年の大会のアピールを行った。

ホスト・ファミリーとの最後の食事は、カジュアル・メキシカンで、パーティーの後も参加者達がホスト・ファミリーと名残を惜しむ姿があらこちらに見られた。

- **ポスト・サミット・オプション・プログラム (9月29日～10月3日)**
サミット終了後、オプションのプログラムとして、次の3つが提供された。
それぞれ参加者達は、サンディエゴに加えて、これらのプログラムの開催地域でも文化体験とホームステイを通して友情を育んだ。

- 北カリフォルニアのバレホ (参加者 17名)
- コロラド・スプリングス (参加者 9名)
- フェアヘイブンとボストン (参加者 9名)

2. 第25回日米草の根交流サミット大会開催にあたっての準備

平成27年の第25回日米草の根交流サミット2015・おおいた大会開催について、以下のように準備を進めた。

開催主旨：日米の人々が国や組織、職業、肩書きなどの立場を越えて、忌憚なく交流する中で相互理解を深める」という趣旨を踏まえ、米国各地各層からの参加者を募り、継続的交流を期待し得るプログラムと、ホームステイによる生活共有体験を通して、より密接で良好な日米関係の構築を目指す。

開催地：大分県11市

開催時期：平成27年7月6日(月)～7月13日(月)

共催団体：日米草の根交流サミット2015・おおいた大会実行委員会

(事務局：大分県企画振興部国際政策課)

顧問： 広瀬 勝貞 (大分県知事)

釘宮 磐 (大分市長)

浜田 博 (別府市長)

会長： 姫野 清高 (大分県商工会議所連合会会長)

上記の他、11名が実行委員会を構成

地域分科会：以下の11市で開催することとし、準備を進めている。

1. 大分市
2. 臼杵市

3. 津久見市
4. 佐伯市
5. 竹田市
6. 日田市
7. 中津市
8. 宇佐市
9. 豊後高田市
10. 杵築市
11. 別府市

オープニング式典&レセプション： 別府杉の井ホテル（別府市）

クロージング式典&フェアウェル・パーティー： 大分オアシスタワー（大分市）

オプション・ローカル・ツアーズ：

大会2日目には以下の4つのローカル・ツアーのコースを準備。

- A. 別府の自然コース
- B. 大分コース
- C. 杵築コース
- D. 由布院コース
- E. 別府の学びコース

大会終了後のポスト・サミット・オプション・プログラムは下記プログラムを設定：

- ① 熊本&東京 協力： 熊本市国際交流振興事業団
- ② 京都&東京 協力： 中山貴恵CIE顧問
- ③ 福島&東京 協力： 福島県国際交流協会
- ④ 東京フリー

募集活動： 2014年12月に米国内の過去参加者に向けてDM。また、ホームページ、facebookなども活用して募集活動を実施中。

TOMODACHI イニシアチブからの助成金を得て、コロラド州グラネイダで第二次世界大戦中の日系人収容所「キャンプ・アマチ」の保存活動をしている高校生を招待できることが決定している。

また、初めての試みとして、テキサス大学ダラス校の学生を募集し、大分での大会後に高知大学で1週間、東京で企業訪問等を行うプログラムを入れる予定である。

3. 情報の発信

- 1) 以下のニュースレター「草の根通信」、また大会速報を発行した。ホームページに掲載するとともに、必要部数を印刷して配付。なお、26年度は9ヶ月間と、例年より3ヶ月間短いため、草の根通信は3回の発行となった。

草の根通信 79 号(7月)

草の根通信 80 号(9月)

サンディエゴ大会速報・号外 — 英語版 (10月)

草の根通信 81 号(12月)

- 2) 活動報告書(アニュアル・アクティビティ・レポート)の発行、準備

- ・ 2013 年版発行(2014 年 5 月)

- ・ 2014 年版準備

- 3) ホームページ、Facebook を通じた発信

大会告知、ニュースレター、大会報告等を掲載した。

以上